令和５年度　第１回
西宮市文化まちづくり推進委員会会議録（要約）

日　時：令和 5 年 7 月 24 日（月）　10 時～11 時 45 分
場　所：西宮市役所第二庁舎 B402 会議室
出席者：【委員】　中脇健児（会長）、武地秀実（副会長）、前田泰洋、三瀬直子、
宮本明香、山下英之、山納洋
（欠席　初田隆）
【事務局】産業文化局長　長谷川賢司、文化スポーツ部長　天田喜之
文化振興課長　石井紀子、同係長　鳴坂敦
同係長　水嶌章博、同会計年度任用職員　上念省三
傍聴希望者：なし
次　第　：

１　開会
２　アクションプラン前期の総括と後期への展望について
①アクションプラン（前期）について
②前期における取組の総括と今後の取組について
３　その他
４　閉会

（午前 10 時 00 分開会）

１　開会
・長谷川局長よりあいさつ

２　アクションプラン前期の総括と後期への展望について

◎事務局
・文化振興ビジョン【第 2 期】の目標や施策の柱、同アクションプラン（前期）との関連や、前回委員会でのご意見に対する市の考え方を踏まえ、アクションプラン前期の取組の総括と今後の取り組みについて説明。

◆委員
・コロナ禍でアクションプランの実行が難しい部分があったが、自分たちも同様に難しさを感じながら取り組んできた。
・ワークショップＢＯＸではウェブ上にデータベースを構築するが、リアルで実施し、それが良

かったから登録するという形でないと難しい。リアルにプラスアルファして動画配信やデータベースを作ることが必要。
・緩やかなつながりという面でライブミュージックマップは良いと思うが、ほとんどの市民は知らないのでは。マップ自体の広報や配架先などをしっかりとお知らせしないと、良いものを作っても届かないと感じた。
・個人の取り組みとして伝統芸能の普及に努めているが、日本や地域の古代からの歴史やそれを含んでいる伝統芸能などを伝えることで、自国や地元への愛着が深まり、誇りを育てることになる。そして自分の立ち位置（アイデンティ）がしっかりしてくる。
・そういった意味で、子どもたちや次世代にユネスコの世界文化遺産にもなっている日本の伝統芸能「文楽」の源流が西宮の「えびすかき」であることを教え、広めることは大切。そのために、私たちは単独の公演だけでなく、他のジャンルなどとコラボレーションをしてより知ってもらえるように尽力している。市でも様々なイベントなどにも取り上げていただけるように、応援していただきたい。
・鳴尾や西宮の昔話には、村の様子やえびすさまが鎮座したいきさつや人々との出会いなどが書かれている。そこには人々の心情などが生き生きと描かれ、ただ教科書で歴史を学ぶだけでなく、心に響く暖かなものがある。そうした点を踏まえて、もっと子供たちに伝えられるように、ふれあいの場、街や村の歴史を感じられる場を提供してほしい。
・学校教育の中でこうした取り組みをもう少し気軽に選んでいただけるようなチャンスを与えてもらいたい。市から教育委員会に働きかけるなど、教育の現場に提案して欲しい。

〇会長
・コロナ禍でデータベースの構築を進めたが、実際の活動とウェブ上のデータベースが両輪になっていないと意味がなく、データベースを継続しながら実際の活動をし続けることが必要。情報発信にあたっては、担い手となる市民の方々の活動をさらに見渡せる機会を増やして欲しいということや、情報を集約してもその情報がどこで手に入るのかということも問題で、他機関との連携をうたっているのであれば、そのハードルを下げ、機会を増やしてほしいとのご意見だった。

◆委員
・学校教育現場ではコロナ５類移行により、教育活動に関してはコロナ前に戻す方向になっており、感染状況を見ながら対応している。
・小中学校アウトリーチ事業について、毎年、大谷記念美術館に４年生の児童全員が訪れ、椅子の展覧会では本当に座らせてもらったりして、触れる、触れられる、五感で感じるということは子供たちの記憶に残る。また、音楽ではお琴と尺八、三味線に来ていただく。これも子供たちがほぼ知ることのないもので日常触れられるものではない。こうした体験は子供たちの目が違う。
・音楽・図工だと、音楽の先生、図工の先生がほぼ各校にいるので、窓口としては入りやすい。伝統芸能は国語の教科書にあるが、学級担任なので同じ先生がずっと同じ学年の国語を中心に指導することが小学校では難しく、その点中学校とは異なる。
・地域のお祭りも戻りつつあり、地元の中学・高校生の吹奏楽やダンスの出演など、わが街をふ

るさととして、子どもたちが育ち、また、その街の大人たちが子供達のために力を合わせて祭りを行うこともよいことで、今後、期待をしている。
・学校へのアプローチについて、チラシ等については、市から出ているものは優先して配布しているが、チラシの量も大変多いので、校長会で趣旨等ご説明の上、対応いただければと思う。

〇会長
・一流のアーティストではなく、緩やかな繋がりづくりということで文教住宅都市を表現するなら、コーディネーターやコンシェルジュなどの存在がとても大事になる。アクションプランでは各指定管理者の動向に注目しているという一行で終わっており、指定管理者任せというか、具体的な方向性がないなら残念。

◎事務局
・実質的には各指定管理者でコンシェルジュ的な相談や紹介業務は実施しているが、看板をつけてアピールするためには、足並みを揃えたり枠組みを作ることについて、指定管理者間の標準化ができないと難しいと思われ、今後の取り組みが必要。

〇会長
・アウトリーチは手間がかかるが、数値評価として非常に見えにくい。それを指定管理者業務として予算化し、市として評価する中で実施しているのか、そうしたことも含め管理もするという形で予算化されているのか。

◎事務局
・アウトリーチは市の事業として予算化しており、児童・教員へのアンケートからフィードバックできている。アーティストのコーディネートは音楽協会の方にしていただいており、市の中にもある程度ネットワークがあるので、実施できているかと思う。

◆委員
・クラシック音楽についてはコロナ禍を過ぎ、だいぶ以前のような活動に戻ってきていると思う。
・コロナ禍の間に、個人の発信や動画配信等が発展し活動の仕方が変わった。得意な人は大変活動の幅が広がったし、そうでない人は変わらず。日本ではクラシック音楽の需要と供給が成立しておらず、ヨーロッパのような需要があるかというと残念ながら少ない。
・西宮市ではコロナ禍での芸術支援もあり、ホールも充実しているので、そういう面で心強さやありがたさは感じている。
・西宮音楽協会は市内在住・在勤や市内の大学卒など、西宮市と関連しているクラシックの音楽家で構成される会で現在 260 名の会員がいる。中には現役を引退された方もいるが、西宮はこうした芸術家が他の市に比べてすごく多い。
・教育の現場でも、子供向けのイベントには沢山の方が来た例もあり、求めている人はいるので、うまく企画しうまく宣伝できれば、需要と供給が回るのではないか。インターネットが得意でな

い人の目にも留まるよう工夫を提案いただきたい。

◆委員
・文化振興ビジョンの理念を実現するには、芸術家、アーティストがかなり大きな役割を果たすことを感じた。
・西宮市は芸術家・アーティストを、「若手」、「地元」「支援」という言葉のほか、「匿名」の存在と捉えているように聞こえるが、実際は「売れていく人たち」だと思う。若い時に育て、無名の若手を支援するのが行政の文化政策だが、それだけではなく「売れると化ける」という世界がある。
・あいみょんは西宮市甲子園に育ち、中学生の時から作詞をし、高校生になったら作曲をしている。これは 2010 年代だが、その頃の西宮市の文化政策の網とあいみょんは別のところを走っていたのか。
・とにかく面白い、すごい人を見出す、育てていく。そういう人は西宮市にいると思う。西宮市にお世話になった結果、売れたとなれば、100 周年は喜んで西宮市に来ますという関係性を作ることができる。
・ただ、行政として特定のアーティストを応援しにくいのでカウンターパートいう存在が必要。こいつは天才だ、とにかく売れるところまでやってやりたいという人がカウンターパート。事務局から外部広報アドバイザー３名の力を借りるとあったが、そうした仕事をできるのか。
・映画「にしきたショパン」の近藤修平さん（プロデューサー、元大阪ガス）は、映画監督と出会い、西宮北口を冠した映画を撮って、世界中の映画祭にアプライし、世界中の映画祭で賞をとり、あちこち飛び回って上映の機会を探している。こうしたアーティストやプロデューサーと西宮市の文化振興政策はリンクしているのか。また、どうすればできるのか。
・アーティストの人々は、売れるまでは食べるのが難しい。俳優なら鈴木亮平さん（大河ドラマ「西郷どん」主演）も西宮だが、売れていくと本当に売れる。一方で、クラシック音楽やオーケストラなど、売れるのが難しい分野や、儲かるかと言うとそうでもない分野の芸術はしっかり支えないといけない。その人たちとどのような時期に、どう関わるかというデザインが必要。
・文化振興ビジョンの策定にあたっては、2017 年改正の文化芸術基本法の考え方を視野に入れ、文化芸術のためだけにアーティストの支援をするのではなく、医療、福祉、まちづくり、教育など他分野にこの力を活かすこととした。これらの実現には、行政の中の他分野との連携や、そうしたことができるアーティストがいないとできない。自分の演奏や前衛芸術的な作品を作ることだけに興味があるのではなく、子供たちや障害のある人、高齢者に積極的に関わること。
・こうした仕事をしてくれるアーティストやプロデューサーを育て、その人たちがやりたいことを実現する。アーティストのＡ面・Ｂ面という言い方があるが、自分が本当はやりたいと思っている芸術表現のＡ面と、社会から求められて提供するＢ面があるとして、Ｂ面の他分野の行政政策に関わっていくようなアーティストをどう育てるか。
・大阪ガスネットワークでは、ＯＭＳ戯曲賞を受賞した作家さんと児童養護施設の子どもたちに演劇のワークショップをしている。子供たちと一緒にお芝居をしたり、ＮＶＣ―非暴力コミュニケーションを踏まえたニーズカードを使ったりして、こういうことを言うときに人はどう思って

いるか、相手はどう思っているかを探りながらコミュニケーションを豊かにする。演劇は上演するだけではなく、子供たちの生き方、コミュニケーションを変えるぐらいの力を持っている。
・社会のための芸術の担い手を、西宮市でどうやって作っていけるかは、文化振興ビジョンを立ち上げたときにイメージしていたこと。次期に進めるにあたり実現していけばと思う。
・アーティストへの寄り添いがうまい公共施設は、今や事業を縮小してしまったが伊丹アイホールがそうだった。また、八尾もアーティストとうまく組んでいるように見える。
・文化振興ビジョンを策定した際に、例えば子育て中のママさんがマルシェをやっていて、自分の作ったものを売ることを経験し、その人が雑貨の作家さんになっていくかもしれないとか、こういった市民の活躍の場を作ることに熱心な自治体はある。
・高度成長期に立った文化ホールが更新の時期になっており、枚方、茨木、高槻では広場みたいなものが横にできて、市民芸術的なものもやってくるし、ワークショップも充実している。西宮市はコロナ禍でアミティの移転建て替えが止まっているが、ハードの更新時にこうした話がすすむ。首尾よく建て替えられたところが、アップデートしながらハードとソフトを充実させようとしているように見える。

〇会長
・出張コンサートの中でも社会包摂的な事業になると少し違い、一緒にやっていく協同、―今の行政が使う言葉でいうと協奏、コ・クリエイティブの分野になるが、実はアーティストにその経験があることが少ない。そのため、その方にチャンスやきっかけ、学ぶ機会を作ることにもなる。
・文化振興財団や指定管理者の方もその認識がない場合があるので、文化振興ビジョンでうたっていることを実現するには実はかなりハードルが高いので、出張アウトリーチに行っただけにならないための要因が何かを考えていただきたい。
・堺市文化振興財団の事業係長の常盤氏がアウトリーチ―社会包摂型のコーディネーターとして非常にいい仕事されているので、是非、機会があれば、足を運んでいただければと思う。

◆委員
・芸術文化センターでは、昨日までの佐渡裕がプロデュースするオペラで６年ぶりに８公演で１万４千人を超えた。お客さんも５類移行ということで開放的になっている。管弦楽団の年間のシートの売り出しも戻り、コロナの影響はだいぶ解消された。
・ウェブや映像コンテンツと実体験や実際のコンサートなど体験の話だったが、実際に観に来てもらうことの大事さを逆にコロナで改めて感じた。
・芸術文化センターのアウトリーチは、芸文センターから遠くの地域―昨年は但馬地域、日本海側をキャラバンで回った。今年は淡路市から洲本市、南あわじ市を回って、各学校の校長先生に大変喜んでいただいた。
・体験を通じた子供たちの反応を見ると、リアルな世界やリアルな空気感がとても大事。特に小さい子供ほど大事だと思う。伝統芸能もすごく大事で、これは地域への愛着を培う時になくてはならない。実際の体験等をどう広げるかという視点が、アクションプランを後期に繋ぐためにとても大事だと思う。

・地域への愛着を高めることに力を入れるならば、この地域で生まれ育っている子供たちが、これが西宮の文化というものに触れることが絶対に外せない。
・西宮は大学生が多くほかの街にはない資源になっている。行政や財団は公平性の観点から特定のものをピックアップしづらいが、NPO や NGO、学生には可能だと思う。ピックアップするのが文化だが、行政はなぜこのアーティストかということがなかなか説明できないのでコーディネートしにくいが、まちへの愛着というところに一歩踏み出すのであれば、その仕組みがほしい。
・コンシェルジュかコーディネーターか繋いでいく役割が必要。繋いだ責任は、その人（当事者同士）が負えばいいと思う。コーディネーターの取組みを見守ることが行政側にほしい。
・文化芸術基本法の話があったが、文化という文化だけではなく子供達でも大人でも、共感＝エンパシーを形作っていく―特に子供たちは演劇でも音楽でも、ともに何かをすることで他者への思いやエンパシーを形作る非常に大事な存在だと思う。西宮の街に対する共感を考えても、総合的にその視点でも進めていくコンシェルジュとかコーディネーターがまさに欲しいと思う。
・文化振興財団や西宮市のセクションがやっているというだけでは厳しい。しかし、そこから少しでも離れたら良いと思うので、何か総合推進役みたいなものが欲しいと思う。

◆委員
・個人の作家、アーティストとして、西宮に根ざし地域に還元していくことを目標に 5 年ほど活動しているが、情報の収集・発信や資金不足に悩むことが多い。生活のため、また、活動を続けるための資金が足りなくて必死な思い。
・情報収集はしているが西宮では必要な情報が少なく、大阪や神戸での活動の繋がりで仕事や支援情報に接する。こうべ文化芸術相談窓口では活動内容を送ると掲示板に掲載されたり、メールで支援情報や出展者・ワークショップ等の情報が届く。
・所属する吹奏楽団では、会場借上料や楽器の保管料などの経費を、補助金も活用しながら団費で賄っているが不足している。定期演奏会は市民の方たちに楽しんでもらうため入場無料で実施しており、団員は時間とお金を削っているが、その恩恵は個人の趣味と言われればそれまで。
・自分はデザインの仕事しているため、吹奏楽団のチラシ・パンフレットを作っているが、仕事としてやっているのに無償でやらなければいけない状態。
・ワークショップを個人で実施する場合、展覧会を見に来てもらうだけで大変なのに、さらに参加費を払ってワークショップに参加してもらうハードルは高い。一方、企業からワークショップ講師として呼ばれると報酬もあり、抽選になるほど人気。本当は自分一人の力でやりたいと思っていても、生活もあるので報酬があって集客も見込める方に行ってしまうところはある。
・アーティストのＡ面・Ｂ面の話に重なるが、本当はアーティストとしてなりたい姿の実現や、子供達に伝えたいこと、ワークショップを通して考えてもらいたいことをメインに活動したいが、時間とお金とエネルギーが足りず、一方はほぼボランティアに近かったり、逆にもう一方は自分でなくてもいいような仕事を求められたり、2 足のわらじでやっていくことにしんどさや限界を感じる。
・新しくオープンするギャラリーでのお仕事の話もいただいているが、ひとりの力で発信していくことや、新しい場所で人が来てくれるかという不安を抱えていたりして、受けるかどうかも悩

んでいるところ。

〇会長
・あいみょんが 10 代のころにやっていたことと、西宮市の文化政策が重なっていたのかというまさに投げかけの言葉だと思う。西宮市に貢献したいと思って必死で取り組んでいるが、活動を続けられるのは企業からのお仕事だったということなど、リアルな活動者の声かと思う。
・情報の集約と実際の活動をどうリンクさせるかや、子供たちはすごく欲しており学校からもニーズがある一方で、どうすればそういうきっかけ―どういう風にかかわっていけるのかとかという声があった。そういう人をピックアップする点で行政という仕組みでは難しいため、パートナーを探して頂きたいとか、きちんと予算化して欲しいという声があった。
・コロナ禍で、計画していたことができなかったかと思うが、少し落ち着いたので、今後、文化振興ビジョン第 2 期の見直しでは関わる人がどう増えたのか、つながりを生み出すことがどう増えたのか、何人・何パーセントということを言わないと総括できないので、やりましただけではない何かが必要だと思う。ぜひ、後期のアクションプランに委員の意見を目標として掲げていただくか、参考にいただきたい。

３　その他
・委員のご退任について

４　閉　会
・長谷川局長よりあいさつ

（午前 11 時 45 分閉会）